
深淵の追悼歌

田村狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵の追悼歌

【Nコード】

N0038BA

【作者名】

田村狸

【あらすじ】

騎士オルグラムはある日公爵家の庭で美しい乙女に出会う。二人は次第に惹かれあつていくが、彼女は狂気の淵にあった。やがて騎士は彼女を運命から救い出すため駆け落ちを試みる・・・

「残酷な描写あり」のタグは保険です。

レクイエム

死したる人は暗き混沌の深淵を渡り、理と混沌の女神の膝元へとたどり着くのだという。

それならば、お前は死んでいるのか。

抱きしめた体は温かいのに、お前の瞳は私のことを映さない。

お前の精神は混沌の深淵の中にある。俺はおるかその血を分けた息子のことまで放って、一人遠く暗いところへ行ってしまった。

胸に耳を照れば鼓動が響き、口付けは熱を帯びているというのに、喘ぐと息はこんなにも狂おしいというのに。

話しかければときに笑い、あるには歌を口ずさむ、

お前の瞳はしかし現を映していない。お前の耳は私の言葉を聞いていない。お前が耳を傾けるのは、ただ気まぐれな神の睦言だけ。

二度と戻れぬところへ駆け去って行こうとしている、お前は死者なのか。

本当に死んでしまったのか。その微笑みはかつてあった生の残滓に過ぎないのか。それとも…まだ生きているのか。そして今まさに死に行こうとしているのか。

緩慢に、湖に浮いた櫂のない小船のように、さまようように岸から離れて、二度と戻れぬところへ、永遠を誓ったはずの俺を置いて・

それとも。

すべては俺の独りよがりな思い込みだったのだろうか。

あなたは最初から、俺の事など見ていなかったのではないか。葦が風に吹かれるままにそよぐように、あなたは俺の情熱に吹かれていただけで、そこには愛など無く、ただ為すがままであったに過ぎないのではないか。

だとしたら。

・・・あなたをころしてもいいだろうか。

葦のように私の愛になびいたのと同じく、俺の殺意のままになびいて、あなたを殺し、その後で後を追ってもかまわないだろうか。死者が渡る深淵に、もしも俺が追いつくことができれば、あなたが見つめている場所に立つことが出来たら、

あなたは今度こそ俺のことを見つめてくれるだろうか。

・・・ああ、本当は知っていた。そんなことではしないと。俺がためらっている間に、あなたのその温かい身体に、あなたが生

きているのだとたまされている際に、あなたの精神はもうずっと遠くに行ってしまった。

ようやくあなたの肉体が後を追ったときには、俺が気付いたときには、もう追いつけないほどに離れてしまったのだ。今頃きつとあなたは、もう理と混沌の女神の膝元にいるだろう。

わっかっている。

それはあなたの優しさだと。

あなたの幼い息子を置いて俺があなたの後を追っていかないように私をあきらめさせるために。この世につながとめるために。

……わかっていたんだ。

あなたはこんなにも優しくして残酷な人なのだと、そう、初めて会ったあの日からずっと。

クロージア、最愛の女。

あなたを愛した事を後悔しない。

出会い

はじめて彼女と出会ったのは、18のときだった。ようやく見習いの衣を脱ぎ捨てて、騎士の剣を腰に帯びることを許された俺は、褐色の髪をゆるく編み、瞳の紺に合わせた一張羅の服を着て、我が家の主君たる子爵ともども魔王の襲撃を避けてイリユースン公爵の城へ非難されてきた国王陛下の護衛のため、エフカール城に逗留していた。

生まれ育った荘園とはあまりに違うその華やかな眺めに我を忘れた俺は、好奇心の命じるままに夜の庭へとさ迷い出て、そこで彼女を見た。

あれは六月の夜。覚えている。白いバラが一面に咲いていた。噓せ返るような香りの中、少女は静かに佇んでいた。白い肌はバラの花弁よりなお白く、月光に照らされてほのかに輝く銀の髪は、滝のように腰まで流れ落ちていた。薄紫色のドレスに縫いつけられた輝石はその息遣いに合わせてかすかに瞬き、憂いを帯びた瞳が天でもなく地でもなく、どこか遠い俺には見えない何かを見つめていた。その美しさに俺は息を飲み、次いで衝撃を受けたことを恥ずかしく思っ、て、粹がった若者そのものの口調で話しかけたのだ。

「こんな夜更にあなたのような美しい人がたった一人でいらっしやるなんて」

たぶん声はうわずっていたと思う。彼女ははっとしたようにこちらを振り向いた。困ったような口調で、あいまいに微笑んだ。

「こんな夜更けくらいにしか、一人にはなれないのです」

遠まわしな拒絶の言葉に俺は思わずたじろいだ。けれど、どうしても立ち去ることは出来なかったのだ。騎士として女性を夜中に一人で置いていうことなどできなかつたからではなく、背を向けたと単に彼女が消えてしまいそうに見えたので。

「じゃあ、私は今夜一晚案山子です。人間でなければ、あなたは一人なのと同じでしょう。あなたがご満足なさるまで、私はここでカラスを見張っていきましょう」

拒否されるかと思つたが、かえつて来た言葉は予想外だつた。

「かし・・・？かしって何のですの？」

「畑に立てる人形のことです。作物を荒らす動物がそれを人間だと思つて近寄らないようにするための」

俺はしどろもどろになつて答えながらはつとした。馬鹿だな。相手は見るからに良家の姫ではないか。たぶん公爵家の縁者なんだろう。案山子なんて知るわけがない。自分が酷く田舎ものになつた気がして顔が熱くなつた。気持ちを切り替えようと他の話題を探す。

「その・・・姫はここで何をなさっていたのですか」

「深淵の歌声を聞いていたのです。人が沢山居る所だと、うまく聞こえないのです」

「深淵の・・・？」

「冗談を言っているようには聞こえず、俺はぞっとした。」

深淵は生と死の間に横たわる暗きふちであり、天地創造以前からの永久の混沌が渦巻く場所。生ある人の訪れることは出来ない理と混沌の女神が支配する世界だ。人がそこを覗き込めば、心を取り込まれて戻ってこられなくなる。

混沌の中には神々の知恵が宿り、その叡智を読み取ろうと自ら身を投じる神官もいるというが・・・。そうして狂気に陥った人の話は何度か聞いたことがあった。

俺は何か問いかけたかと思っただが、何も口にする事ができなかった。そのことは触れてはいけないように思われたのだ。場を持たせようと代わりの話題を探すが、思いつかなかった。侍女は何処ですかとか、あなたはどなたですかとか、後から考えれば言うべきことは山ほどあったはずだ。しかし、慣れない宮廷言葉に四苦八苦ししていたせいもあったのだろうか。そのときの俺はただ呆けたように突っ立っていて、彼女もまた何も話しかけようとはしなかった。

俺たちは互いに無言でしばらく見詰め合っていたが、やがて姫君は軽く会釈をすると、背を向け歩き出す。

このまま行かせたらもう二度と会えないにちがいない。

とっさに口を開いた。

「あの、姫君。案山子をお持ちいたします」

「えっ？」

乙女は怪訝な顔で振り向いた。

「口で話すだけではどんなものかご想像がつきにくいでしょうから。あの、もしよかったら。あ、ええと、姫君は、よくこちらに来られるのですか？ここにお持ちしても、その・・・」

しどろもどろの言葉に、彼女は薬と笑みを漏らした。春の日差しのようになやまさしさに息を呑む。

「私の名はクロージア。イリュースン公爵の長女ですわ。ここは私の庭。よく散歩いたしますの。この時間でよろしければいらっしやうて、騎士殿」

公女。同じ貴族とはいえ、田舎の莊園騎士の次男坊と公爵の娘では、天と地ほどに身分が違う。どっと冷たい汗が噴出した。

「・・・公女様とは露知らずご無礼を」

「気にしておりませんわ。それと、私のことはクロージアと。この薔薇園は聖域。世俗の身分も争いも及ばぬ所です。あなたの名前を教えて下さる？」

「気にするな、と言いながらもクロージアと呼べと言う彼女の言葉には命令に慣れた者特有の有無を言わせぬ響きがあった。俺は片足を引いて腰を折ると、動揺を表に出さぬよう、出来る限り正確に騎士の名乗りの作法をなぞった。

「我が名はオルグラムⅡイルアスⅡファン・オリアン、ザハーリンの莊園を預かるケネスⅡシルクルディアⅡファン・オリアンの次男でございます。公じ・・・クロージア様」

「案山子、楽しみにしているわ。オルグラム」

それが私とクロージアの出会いだった。

* * *

相手は公女。迷いながらも結局、翌日の夜再び訪れた俺に、彼女は少し驚いたように見えた。また来いと言ったのは単なる社交辞令だったのかと俺は不安になったが、クロージアは柔らかなく微笑むと、案山子を持ってきてくれたのかと尋ねた。

「それが・・・誠に申し訳ないのですが、もって来られなかったのです。その、大きいものですので、途中で見張りの兵にとがめられてしまいました」

「まあ、大丈夫でしたの」

「ええ。しかし、練兵用的と間違えられてしまいました、持っていかれてしまいました。今頃は槍でつつかれていますことでしょう」

俺は姫君にお見せするために昨夜徹夜で案山子を着飾ったのだ。恥ずかしいのを我慢して買ったレースやリボンで彩られた案山子だが、その芸術性を理解して頂く機会はついに訪れなかった。

「そうでしたの。あなたが無事でしたら、別にかまいませんわ。実は私もあの後、父に案山子とはどんなものなのか聞いてみたのです。

そうしたら、父が持ってきて下さったのです。これであっているのか、持って来たのですけれども」

クロージアは上着の隠しから小さな人形を取り出した。十字に組んだ木を中心にして、麦藁帽子をかぶった様は確かに案山子だ。正直イリユーシン公爵閣下がそのようなものをご存知であったとは以外だ。しかしこの案山子、藁細工だが恐ろしい顔が描かれ、胸には釘が刺さっている。

「こうして地面に刺すのですわね」

「ええ、そ、そうですが。この釘は？」

「父が、遠い東の王国には呪いの藁人形と五寸釘と言う風習があるらしいと。それから、案山子は領地を脅かすもの共から守るものだと聞いたと仰っていて。アーノルファンなど地獄に落ちてしまえ、と釘を打たれたそうです」

俺は遠目から見たことのあるいかにも冷徹そうな公爵の顔を思い出して妙な気分になった。何かいろいろ間違っている気がした。確かに案山子は藁で作られることも多くて、畑（領地）を守るための物なのだが。案山子が排除するのはカラスや猪であって、政敵を排除するために案山子に釘を打ったりはしない。だが、子の珍妙な代物を前に、俺は会ったときの緊張を忘れていた。

「さようですか。して、斯様な物を何処から手に入れられたのですか」

「領民の献上品です。城の裏手の木に括り付けているところを見つけたそうです。そのものの家族は処刑されたそうですが、横暴な夫から解放してくれてありがとう、と感謝の印なのでしょうね。近隣でも評判の悪い男だったそうですから。騎士が近づいたら恥ずかしくて逃げてしまったそうですが」

誤解ではないか、と思った。が、言えばその妻の身が危ういのだろうし。…と言うか、あれは案山子じゃなかったんじゃないか。まあ、余計なことは言わないで置こう。案山子の使用方法についても、やんごとなき人々の風習はまた違うものなのかも知れない。俺は無視することに決めた。

「イリューシン公爵は、面白いお方そうですね」

「そうですね。私父が大好きなんですの。父は・・・」

突然クロージアは言葉を切ると、心ここにあらずといった態度で立ちすくんだ。瞳は何か気に取られたようにじっと一点を凝視している。しかし、その視線を追いかけても何も見つけることは出来なかった。

「クロージア様？姫？いかなさったのですか。どこかお加減でも」
何度か呼びかけると、彼女ははっとしたように振り向いた。その顔は月光の下でも少し青ざめているのが判った。

「クロージア様」

「大丈夫です。少しぼうつとしていました。それで、何を話していいましたっけ」

「あなたの父君の事を。しかし、今日はもうお休みくださいませ。お顔の色がよろしくありません」

「お気遣いありがとうございます。確かに、少し疲れたみたいです。今日はあなたのおかげで楽しいときを過ごせましたわ」

クロージアは力なく笑うと、ドレスの裾を優雅につまんで背を向けた。

去り行く彼女の後姿を、俺はただ見守るしか無かった。

秘め事

そのころ、魔王が我が国を脅かしてはいたが、実際にその危機が迫っていたのははるかに南のことで、警備とは名ばかりに大してすることも無いまま、俺は連日彼女と会った庭に通うようになっていた。

彼女はほぼ毎日この庭を訪れているようだった。彼女は最初若干ぎこちなかったが、だんだん私にいろいな事を話してくれるようになった。俺も次第に、公爵家の姫を前にしているという緊張感が薄れ、一人の友人として、そして女性として彼女を見るようになっていった。

会話は大体たわいも無いことだったが、その中で彼女の公爵家での立場が語られることはなかった。

クロージア。俺はその名前を聞いたことがなかった。イリュージョン公に姫君があられることは知っていたが、彼女は社交界に出るところか姿を現すことも無い。掌中の珠である美しい姫君を公爵は人目にさらすのを嫌がっているとか、逆に病がちだとか気狂いであるとの噂もあるが、とにかくその存在は適齢期にあるにもかかわらず謎に包まれていた。

だがそのときの俺は、クロージアのその美しい姿を見て、おそらく公爵が溺愛して男の目から隠しているのだと単純に納得していた。

その彼女は、本来ならば直接言葉を交わすことも出来ないような人だ。ましてや、二人きりで夜に会うなど。けれど、どちらもそうした事を口にも態度にも表さなかった。確かにこの薔薇園は一種の

聖域だったのだ。それがたとえ仮初の物であれ、身分からも、性別や情欲からも解き放たれた場所。そう、あの時まで。

*

*

*

ある日俺は、思い切って前々から気になっていたことを口にした。

「姫君は、深淵の響きが聞こえるのですか」

「ええ、オルグラム殿。小さいころからそうでした」

「聞きたいと……わざわざ聞きたいと思われるのですか」

「はい。深淵は……混沌の海は私のことを呼んでいるのです」

「もしかして、あなたが偶に、心ここにあらずと言った様子を見せることと、何か関係があるのですか」

「はー」

ひゅっ、と息を飲む。

それは俺が恐れていることだった。

彼女は偶に呼びかけても反応しなくなることがあって、そんな時は決まってどこか別の世界を見ているような近寄りがたい空気を身にまとっていた。それでも、今までは大抵何度か呼べば正気に返っていたのだが、ここ何日か、前よりも現実を見失う頻度が増え、戻ってくるのにも時間がかかるようになっていた。

そのことが示す答え、それは迫り来る悲劇を予感させた。

「あなたは、まさか『深遠をのぞむ者』になるつもりではありませんよね？それがどういう意味を持つか分かっているのですか」

俺には自ら人生を放棄するような選択をする気持ちなど、到底信じられなかった。しかし彼女は、一縷の望みをあっさりと否定した。

「ええ。そのつもりです。呼び声は日増しに強くなっています。それに抗う心は私にはありません。もっと早くにお話すべきだったでしょうが。そんな顔をなさらないで」

俺はたぶん泣きそうな顔をしていたのだと思う。このあと何度もそうするのと同じように。

「抗う気力がないと？あなたにとって、この世はそんなに住み心地の悪いものなのですか。混沌のかけらを抱いて生まれてきても、全員が『深淵をのぞむ者』となるわけではないと聞いておりますが」

世界にはもともと店も地も光も闇もなく、ただ混沌が広がっていたのだと言う。そこに理と混沌を司る女神が降り立ち、秩序を与えた。混沌を材料に私たちの住む世界を作ったのだ。だからこの世のすべては混沌に与えられたかりそめの姿。万物は、死ぬとその魂が混沌の海に還る。そしてそこですべての記憶や執着が解けると、再び練り直され新しい魂となる。新しい魂は混沌の海のある光の道を通ってこの世界に新しく生まれ出でるのだ。

しかし、極まれに魂の中心に形を成しきらなかった「混沌のかけら」を抱いたまま生まれってくる者がある。そうしたものは「混沌のかけら」が混沌の海に還ろうとするのに引きずられ、惹きつけられる。彼らは生きていながら混沌の海が広がる深淵の声を聞き、覗き見ることさえ可能なのだと言う。

混沌の海はあらゆる物の始まりであり終わり。すべてを支配する女神の領域。そこには、大きな知恵が眠っている。そのため混沌の海を見、声を聞くものは預言を行う聖職者として『深淵をのぞむ者』と呼ばれる。

しかし、深淵は死者の還るところ。本来生者が関わってよいものではない。『深淵をのぞむ者』は、混沌の海で智を得るたびに、代わりにこの世の記憶を失っていく。そしてまた、長く混沌に触れるほどにその魂は混沌に溶けていき、だんだんと正気を失い、最後には魂だけが先に輪廻の輪に還り抜け殻となってしまう。そのため、『深淵をのぞむ者』は生きながら半分死者であるといわれる。

彼らが混沌に魅かれるのは仕方のないことだ。でも、「混沌のかけら」を抱いて生まれてきたものがすべて『深淵をのぞむ者』として正気を失うわけではない。呼び声に抗って世俗で普通に生活し、天寿を全うする人だって沢山いる。もつとも、呼び声の強さは人により様々だとも言うが。

彼女が『深淵をのぞむ者』になるなど考えたくなかった。

「よくご存知でいらつしやいますのね。確かにすべての人が『深淵をのぞむ者』となるわけではありません。儀式を経て、その精神すべてで混沌に「潜る」ことをしなければ、あるいは正気を保てる時間は長くなるでしょう。」

でも、私を呼ぶ声はとても強く、あなたがお気づきの通り、すでにこの身は彼方の声に・・・光景に囚われているのです。いまさら抗おうとは思えません」

「どうして。公爵閣下は　　ご家族やご友人のことはどうでもいいのですか。あなたはなぜ・・・」

「両親は、覚悟しています。不思議に思われたことはございませんか。どうして私が社交界に姿を現せるのか、こんなに毎日侍女も連れずに、庭に下りて密会などすることが出来るのか」

「それは・・・、あなたを溺愛して人目にさらしたくないからだ」と

薔薇園のことは俺も不思議に思っただけだが、自宅なのだからどうにでもなるのだろっくらいにしか思っただけじゃなかった。

「人目にさらしたくないのは事実でしょうね。私は偶に、奇行をとりますから。ああ、誤解なさないで。両親は私を愛してくれていますわ。社交界が私の精神の負担となることを気遣ってくださいているのです。それに、私の自由を尊重してくださいているのですわ」

クローディアはそう言っていたはずらっばく方目をつぶって見せたが、強がっているようにしか見えなかった。

「私の中の混沌はとても強力なものです。自ら神官となる道を選ばなくても、そう長く生きることはできないかもしれません。ゆっくりと、築かぬままに狂っていくことが怖いのです。お父様やお母様に、その姿を見せたくない……。それくらいなら、いつそ神殿で世の役に立ちたいと思うのです。それに……」

彼女は日と臣を伏せて、咲き初めの薔薇の花びらを撫でた。そのはかなげな姿に、唐突にいとしさで怒りがこみ上げた。今まで心の奥に押し込めていた感情が奔流となって押し寄せて、気付いたときには、俺は後ろからクローディアを抱きしめていた。

クローディアが驚きに身体をこわばらせる。かすかなあえぎ声と、二つの鼓動が重なって夜の闇に溶けた。

「クロージア、あなたは間違っている」

「・・・オルグラム、何を・・・？放しなさい」

我に返ったクロージアが腕をもぎ離そうとした。腕に力をこめる。

「いやです。もし緩やかに狂気に陥る姿を見せたくないから神殿へ行くなどというのが理由ならば、あなたは間違っている。私は・・・いえ俺は、あなたのご両親は、一日も長くあなたに傍に居て欲しいんです。たとえばいつかは狂気に陥るとしても、それまで一日も長く狂い始めても・・・少なくとも俺はあなたの傍に居たい。いや、向こう側になんて行かせない様に、全力で引き止めて見せます。あなたは、クロージア様はあなたを愛する人たちの事を見くびっていません」

「オルグラム？」

クロージアは抵抗をやめると、俺のほうへ首をめぐらせた。青灰色の瞳が見開かれている。

「クロージア様・・・俺はあなたが・・・好きです・・・」

言うてしまった。なんとという身の程知らずなことを。頭の奥で理

性がうめき声を上げた。しかし、熱情に浮かされた心は留まるところを知らなかった。いったん離れたクロージアを温度は前から抱きしめると、強引に首を傾け口付ける。柔らかな感触が唇に当たった。

どん、と胸を叩かれ、クロージアが拘束から逃れた。急に冷たくなった腕に、遠ざかっていた理性が舞い戻る。俺は大地にがばと跪いた。

「クロージア様。ご、ご無礼を致しました。この非礼、お望みなら我が命であがないます。でも、でもどうか、重ねての無礼を申し上げますが、『深淵をのぞむ者』のことはお考え直し下さいませんか」

「……あなたの命をとるつもりはありません。無礼だとも思いませんでした。私も、望んでいたことです。ただ驚いただけで」

小声だった。だが、聞き間違えではなく確かに聞こえたのだ。

私も、望んでいたことです

「クロージア様？今のお言葉は」

問い返す間もなく、クロージアは駆け去っていった。その後姿を、私はなすすべもなく見送った。

真意を聞きたい。俺はそう思ったが、それから何日たっても、彼女がああ薔薇園に姿を見せることはなかった。

* * *

思えば、ここは彼女の庭だというのに俺はいつも見送る側だったような気がする。クロージアは、本当に、いつも後ろ姿ばかりが記憶に残る女だった。その最期でさえ、追いつかれるのを拒むがごとく、一人俺に背を向けて行ってしまったのだ。

夢げなのに、あれはなかなか強情だった。

そういうところは本当にあの子によく似ている。

ルド公子（前書き）

誤字脱字報告大歓迎です。

無理して軽い会話を入れようとしたら酷いことに・・・

ルド公子

クロージアに関する二つの噂が城内に広まりだしたのは、あの日から一月ほど後のことである。一つは、神殿に新しい『深淵をのぞむ者』迎えられるらしく、それがイリューシン公爵家縁の者であるであること。もう一つは王国6公爵家の一つルド公爵家の次男からイリューシン公爵家に向けて縁談の申し入れがあるらしいことだった。どちらもあいまいなものであるが、この二つの相反する噂に俺は混乱させられた。

イリューシン縁の『深淵をのぞむ者』候補者はクロージアのことで間違いないだろう。だが、神殿に入るならば、結婚は出来ない。さりとて、ルド公爵家ほどの家が、いかなイリューシン公爵家とは言えど、たとえ次男でも分家との縁組を結ぶようには思えなかったのだ。

クロージアの存在自体はあまり有名ではなく、彼女が「混沌のかけら」を有していることは更に知られては居ないが、イリューシン公爵家に姫が二人居ること自体は有名だ。ルド公爵家に嫁ぐのは二番目の姫かとも思われたが、彼女はすでに婚約しているとも聞く。もっともその相手は伯爵家の子息で、貴族にあつてより高い家柄のものに結ぶために婚約解消が行われることは珍しくないが。

では、やはりクロージアは神殿へ行ってしまふのだろうか。私の説得は聞き入れてもらえなかったのだ。かといって他の男と結ばれるのと神殿へ行くの、どちらがましかと言われれば懊惱してしまいそうだが・・・いったいどちらなのか。私は気になってたまらなかった。

「おい、呼び出しだぞ」

同僚の声に私は我に帰った。

「隊長か？」

「いや。ルド公子、ニール様だ。お前知り合いだったのか。朴訥そうな顔をして隅に置けないじゃないか」

「ルド公子閣下？いや、知らない。ジュネ、何も聞いてないのか」

「ああ。ただ呼んで来いと。お前、本当に心当たりないのか。何か不始末をしたんじゃないだろうな。お前のことだから、修羅場に居合わせて余計な一言を言ったり公のか犬に変な芸を教えたり裏帳簿で鼻をかんだりそれを公の部屋のゴミ箱につっかり捨てたりしたんじゃないかと心配だ」

「お前は俺を誤解している。何処に目をくつつけているんだ」

「私の眼球が見えないとしたら相当まずいぞ。ほら、お前たちもそ

う思つだろっ」

問いかけられた同僚たちがごくごくと首を縦に振るのが見えた。

「お前ら、何でうなずくんのだ。俺よりジュネの味方をするのか？」

「当然。死にそうなやつの味方をしてもうまみが無いだろ」

「おい」

「喧嘩したいならちゃんと戻ってこい。とにかく、お前はとにかく間が悪いやつだから気をつけるよ」

ジュネというこの少し年上の同僚は気遣わしげに眉を潜めた。彼は口は悪いしやたらと兄貴風を吹かせるが、心根はいい騎士だ・・・その妄想を除けばたぶん。

「大げさなやつだな。もしかしたら玉の輿の話かも知れないぞ。後で悔しがるなよジュネ」

「ぶはっ、玉の輿。まあ、ルド公子は美男らしいけど、俺は男なんざ城をもらえるったってお断りだよ」

「気色悪いことを言うな。・・・まあ、とにかく行ってみるよ。たぶんたいしたこともない使い走りだろうよ」

心配するなと軽く手を振って詰め所を後にしたが、心には暗雲が垂れ込めていた。

ルド公爵の公子、ニール。イリユーシン公女の夫候補として噂されている人物だ。その男に呼び出される。

彼の縁談の相手はクロージアだったのだ、と直感した。面識もない一介の騎士が呼び出される理由というのは、彼女のこと以外に無いだろうから。私はぎりりと歯をかみ締めた。

* * *

呼びつけられた扉の前に差し掛かるとノックをしようとしたが、そこで思いとどまった。来客中のようでは話し声がする。

「混沌のかけらを持っていると聞きますがいいのですか。妻にするのに気違いでは……」

「かまわん。道具と同じだ。子供さえ生めれば気が狂おうと何だろうと。あの一族は魔力が強い。特に混沌のかけらを持つものは魔術に秀でていると聞く」

「まあ、なかなか美人ではありませんね」

「確かに。他に好いた男でも居るのか、嫌がってはいたが、無理矢理と言うのも悪くはない」

何て事を。

中に居るのはルド公子と誰かに違いない。あんな男とクロージアは結婚させられそうなのか。腹が煮えくり返りそうだった。これ以上聞いていたくなくて、荒々しく扉を叩いた。

「失礼いたします、お呼びと伺いましたが」

「入れ」

豪奢に飾り立てられた応接室の中には、二人の青年が立っていた。一人は従者らしき空色のお仕着せを着ている。もう一人は金の巻き毛を背にたらしめた、緑の瞳の美青年だった。豪奢な服装からしても、こちらがルド公子だろう。

「これは、来客中であられたのですか。気がつかず、誠に申し訳ございません」

白々しい。そう思いながら声をかけると向こうもそう思ったのか、立ち聞きしていたのは分かつているんだぞ、とでもせせら笑うような、それでいてどこか値踏みするような視線でこちらをじろじろと眺めた。

「かまわぬ。世間話をしていただけた。おまえには、気に食わないようだがな」

彼は従者に下がるよう手を振ると、小卓のグラスに酒を注いだ。それを手に持つと、椅子の背もたれに背を預けてにやりと笑う。

「オルグラムといったか。あの女に近づいているそうだな」

「あの女とは、クロージア様のことでしょうか。公女様に対して失

礼な言い方では」

相手が大貴族であることなどそのとき俺の頭から吹き飛んでいた。敵愾心もあらわに言い返した。

「女は女だ。私は別にあれが何を考え誰を思っているのかなどどうでも良い。ただ、両家の同盟の証として子をなせばそれでよいのだ。世間の連中はやたらとありがたがっているようだが、子の血統さえ確かならば処女かどうかも気にはしない。だが、単刀直入に言おう。醜聞は困るのだ。我が家は公爵家。嫁にする女に男がいるなどということは許せぬ。それは分かるだろう」

「貴方は、あの方の心などどうでもよいとおっしゃるのですか。政治上の……子をなすための道具に過ぎないと?」

「それ以外に何がある。あのような半分気の狂った女。ああ、声もなかなか良かったな。よがり啼くのを聞いてみたいような気はする」

「……貴様」

思わず低くうなると、公子はああこわい、と大げさに肩をすくめ、片方の唇を吊り上げた。

「元気のいいことだ。まこと若いとはすばらしい。どのような短慮も情熱の一言で許してもらえるなどと思いつめるのだからな。が、そのような言い方をしているのかな。たかが騎士風情が」

そこで急に公子は笑みを納めて鋭く睨んだ。氷のような眼差し。私は思わず息を止めた。その様子を確認すると、公子はふっと視線を和らげると、先程までのいやみな笑みに戻った。

「とにかく、醜聞は困る。あれには二度と近づくな。あれは結婚するくらいなら今すぐ『深淵をのぞむ者』になるなどといって西の離宮に閉じ籠ってしまっているが・・・まったく無駄な事をする。女とは愚かだな。孕んでからなら狂おうと深淵に墮ちようと勝手だが、今は困る。おとなしくしていれば、そうだな。確かお前は次男であったか？ 荘園のひとつも与えてやらんでもないぞ」

「そのような取引、応じると思うのか」

怒りのあまり、声がひっくり返りそうになるのを懸命に抑えたが、もはやへりくだった宮廷言葉を話す気にはなれずにいた。

「無礼だな。まあいい。どの道お前があんな女とどうこうなることは在り得ぬ。従順か、そうでないのかの違いに過ぎん。おっと、言うておくが、駆け落ちなどという馬鹿なことは考えるなよ。もっとも、そんな度胸は無さそうだがな。まあ、よく考える」

口を開けば取り返しのつかないことを言ってしまうそうだった。なけなしの分別で唇をかみ締め無言でいる私に対し、公子はぐいとグラスの中身をあおると顎をしゃくった。

「話は終わりだ。もう行け」

私は震えるこぶしを握り締めて無言で礼をすると、部屋を辞去した。

扉を乱暴に閉めた途端、力任せに壁を殴りつけた。見張りの兵が鋭い目つきで睨みつけてくる。それを背に感じながら回廊を歩み去り、ようやく人気の無い中庭に出ると、低くうめいてしゃがみこんだ。

何とか理性を保ったおのれを褒めるべきかけなすべきか。あの男を危うく殴り飛ばすところだった。完璧な宮廷流の発音で話される美声の、しかしねっとり絡みつくような声音が耳について離れない。

彼はクロージアのことなど毛筋ほども考えていない。狂人であつていいと言うのも懐の広さを示すのではなく、ただ無関心なためだ。あんな男と結婚してクロージアが幸せになれるとは到底思えなかった。それくらいならいっそ

駆け落ちなどと馬鹿な事を考えるなよ。もっとも、そんな度胸は無さそうだがな

彼の言葉が耳に蘇った。そうだ。駆け落ちしてしまえばいいのだ。そのときまでクロージアは憧れではあったが、手の届く、伴侶として現実の選択肢にある存在ではなかった。しかし皮肉にも、公子の言葉は俺を決心させることになった。

後から考えたら、それは皮肉でもなんでもなかったのだが・・・。

彼女は西の離宮に居ると言っていた。もしかしたら嘘かも知れないが、作為のあるようには見えなかった。調べてみる価値はあるだろう。俺は駆け落ちに向けて、計画を練り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0038ba/>

深淵の追悼歌

2011年12月31日00時53分発行